

2021. 2. 7

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 36

---

目次

**1) 支部長挨拶**

巻頭言 やっぱり「転んでもただでは起きな」かった

ー【続】2020年度（令和2年度）の支部活動に関する重要なお知らせー

（福岡教育大学 吉武正樹）

**2) 今年度の支部大会について**

第27回九州支部大会開催のお知らせ

（久留米工業高等専門学校 横溝彰彦）

**3) 今年度の支部活動予定**

『九州コミュニケーション研究』第18号の報告および第19号の投稿論文募集

（神田外語大学 塙幸枝）

**4) 特別寄稿**

感染の増減が繰り返される世の中で考えること

（熊本大学 平野順也）

**5) 会員からのメッセージ**

① ディベートとの出会い、ディベート教育・研究への抱負

（九州大学大学院 上土井宏太）

② 自己紹介と研究テーマ

（西南学院大学大学院 岩崎舞子）

**6) 編集後記**

## 1) 支部長挨拶

### 巻頭言 やっぱり「転んでもただでは起きな」かった

#### —【続】2020年度（令和2年度）の支部活動に関する重要なお知らせ—

支部長：吉武 正樹（福岡教育大学）

「嵐」の活動休止で幕を閉じた2020年は、文字通り嵐のような激動の年となりました。支部活動を含め、みなさまの研究や教育、日常生活も大きな変化と制限が強いられたのではないのでしょうか。

一方、コミュニケーションという意味では、コロナ禍をきっかけに Zoom や Meet 等を使用したオンライン授業や会議、イベントも一般化し、また、芸能人の YouTube 進出が進むことによる、テレビとインターネットの関係性の地殻変動も起きました。私たちコミュニケーション研究者としては、この時代の意味を包括的かつ深く理解し、次の時代へ向けた新たなビジョンを提案し続けるという重要な責務を負った、そんな年にもなったと感じています。（なお、[JCA 本部の NL125 号（2020 年 11 月）に「コロナ禍と SF」と題した巻頭言を寄稿](#)しました。合わせてお読みくださると幸いです。）

さて、今回の巻頭言のタイトル。前号の「転んでもただでは起きぬ—2020 年度（令和2年度）の支部活動に関する重要なお知らせ—」と酷似しています。ややこしくてすみませんが、これは（1）今年度の支部大会の中止、（2）その代替としての次号支部紀要における特別企画、を報告した前号との「連続性」がある、ということです。

そこで、重要なお知らせ。このたび、一度は中止した「[2020 年度（令和2年度）第 27 回九州支部大会](#)」を復活させることにしました。

2021 年 3 月 20 日（土・祝）、オンラインでの開催を予定しています。

研究発表の募集や日程の詳細については、巻頭言に続く「第 27 回九州支部大会開催のお知らせ」にて、「復活劇」の真の立役者・横溝彰彦事務局長から説明があります。また、この間の経緯については、[JCA 本部 NL126 号](#)の「支部ニュース」欄に掲載予定です。こちらもあわせてご覧ください。

支部紀要『九州コミュニケーション研究』の特別企画については、今回は研究発表のみの縮小した大会となるため、基調講演やシンポジウムの代替として、継続して行う予定です。企画自体は遅れていますが、別途、支部 ML にてご連絡します。

前回の巻頭言では、支部会員が持つ学問や研究、教育への情熱を、HOUND DOG「ff（フォルテッシモ）」の歌詞にある「胸の熱いたぎり」と表現しました。この曲は次のように続きます。

拳を固めろ 叩きのめされても  
激しく たかぶる夢を眠らせるな  
あふれる思いを あきらめはしない

まさに、私たちのことではありませんか。やっぱり、九州支部は転んでもただでは起きなかった！

緊急事態宣言で幕を開けた 2021 年 1 月ですが、この曲の最後のように、九州支部として今年も「愛をこめて 強く強く」突き進みましょう。

## 2) 今年度の支部大会について

### 第 27 回九州支部大会開催のお知らせ

事務局長：横溝 彰彦（久留米工業高等専門学校）

第 27 回九州支部大会を 2021 年 3 月 20 日（土）に、オンラインで開催します。

新型コロナウイルスの感染が拡大し、4 月 7 日に緊急事態宣言が 7 都道府県に発出されるなど混迷のさなか、5 月 25 日に今年度の支部大会中止をお知らせしました。しかし、支部会員の皆さまに研究成果をご発表いただく機会をなんとか設けたいと考え、初のオンライン開催に挑戦することにしました。

とは言え、提案者の私は Zoom をほとんど使用したことがありません。なにせ初めてのことで、例年のようにはいかないと考え、あまり欲張らずに支部大会で最も重要な部分に専念することにしました。今回は大会テーマや基調講演は設定せず、研究発表のみの実施とさせていただきます。

大会までのスケジュールは以下の通りです。

発表申し込み締め切り：2 月 14 日（日）

大会プログラムの発表：2 月下旬

参加申し込み締め切り：3 月 14 日（日）

第 27 回九州支部大会：3 月 20 日（土）

バレンタインデーとホワイトデーが近づきましたら JCA 九州支部大会を思い出し、発表や大会参加をお申し込みください。理論や理念に関する発表だけでなく、教育実践や社会実践の報告などもお待ちしております。

大会要項や発表申し込みの詳細は、支部 HP に掲載しています。

JCA 九州 HP：

<http://www.caj1971.com/~kyushu/>

今回は交通費も宿泊費も不要です。何名の方にご発表いただけるのか、また何名の方にご参加いただけるのか不安もありますが、新しいことにチャレンジできることに楽しみも感じています。パソコンのモニター越しに、お会いしましょう。

※カメラをオフにしてご参加いただいても大丈夫です。



イラストは

[https://www.irasutoya.com/2020/04/blog-post\\_250.html](https://www.irasutoya.com/2020/04/blog-post_250.html) からの引用です。

### 3) 今年度の支部活動予定

## 『九州コミュニケーション研究』第18号の報告

## および第19号の投稿論文募集

紀要担当運営委員：埴 幸枝（神田外語大学）

平素よりお世話になっております。9月に『九州コミュニケーション研究』第18号を刊行いたしました。ご尽力いただきました紀要編集委員の先生方、査読者の先生方には、心より感謝申し上げます。本号では特別企画「ローカル・メディアの役割」として、九州支部第26回大会で行われたパネルディスカッションの内容をもとに、高峰武氏、林田真心子先生、青沼智先生から寄稿論文をお寄せいただきました。大会での議論に加え、先生方にはローカル・メディアを捉えなおすためのさらなる視点をご提示いただいたことで、充実した企画内容となりましたこと、お礼申し上げます。また、本号では1件の研究論文と1件の研究ノートを掲載しております。山本真知子氏、池田理知子先生には、貴重な論文をご投稿いただきありがとうございました。今回は『九州コミュニケーション研究』の刊行をJCAのHPや公式Twitterでご紹介いただいたこともあり、学会員の方々から広く反響をいただいております。すでにメーリングリストでお知らせいただいたように、『九州コミュニケーション研究』は日本コミュニケーション学会九州支部HPに掲載されておりますので、みなさまにもぜひ一読い

ただき、感想などお寄せいただければ幸いです。

さて、紀要委員ではまもなく『九州コミュニケーション研究』第19号への本格的な取り組みを開始するところです。現在、第19号への投稿論文を募集しておりますので、みなさまには奮ってご投稿いただきますようお願い申し上げます。例年は投稿論文の締め切りを1月末日としておりましたが、今年3月に支部大会が開催されることをうけて、第19号の締め切りは4月以降を予定しております。支部大会でご発表される先生方は、その成果を支部紀要にもご投稿いただければ幸いです。発表をご予定でない先生方も、支部紀要では「研究論文」「研究ノート」を広く募集しておりますので、日頃の研究成果をご執筆いただきますよう、ご投稿を心よりお待ちしております。『九州コミュニケーション研究』第19号では特別企画も掲載予定です。詳細につきましては、次回のニューズレターでお知らせできるかと存じます。今後も支部のさらなる発展に貢献できるよう支部紀要の編集に尽力してまいりますので、紀要編集委員の先生方をはじめ、運営委員の先生方、九州支部のみなさまにはお力添えいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### 4) 特別寄稿

## 感染の増減が繰り返される世の中で考えること

副支部長：平野 順也（熊本大学）

皆さま、ご無沙汰しております。お元気ですか。世界中が大変なことになり1年が過ぎようとしています。皆さまのご家族やお知り合いの方々への被害が最小限であることを切に願います。ある休日に仕事のために学校へ向かっている途中、近くの公園に長蛇の列があるのに気付きました。学生への支援として食品や物資の配給が行われていたのです。いつもなら子どもたちが戯れている牧歌的な場所に、大人の列が長く伸びていました。学生たちは大きなビニール袋一杯に支給物資を詰め込んでいました。幸いにも大きな影響を受けていない恵まれた場所から眺めている自分に対して強い違和感というか嫌悪感のようなものが湧いてきました。

かなり前から、私は自分が健全なラポールの把握が苦手であることは理解していました。両親も繰り返し、臨床心理士といった職業は私の性格には適さないものだと言っていました。コミュニケーション学に魅力を感じたのもこの苦手意識に起因しているのかもしれませんが。大学院時代に出会った非常に厳しい恩師は、ブーバーとロジャースを例にしながら、カウンセラーは相談に訪れる人々の問題を分析し、理解し、提案できる者であると説明していました。そして、コミュニケーション研究に従事する者は、そのような能力、スキルや目的を持たないのだ、と言うのです。我々が出来るのはせいぜい「他者の傍にいる」ことだ、というわけです。勿論彼の言っている「傍」はラポールとは無縁の関係性だと思えます。他者が悩んでいるなら

ば、共に悩み、と彼は説いていました。公園の列を見た後の研究室でこう書いている今もお、学生の姿が脳裏から消えないのは、私が他者の傍にいないということの証明なのかもしれません。

大澤真幸は彼の著書『自由という牢獄』で「『自由』に先立つ、何らかの価値へのコミットメント」の必要性について述べています。人々が自由を求め続けた結果として、自由を否定せざるを得ない新たな価値の壁が立ちはだかることとなります。環境問題などはこの自由を制限する壁の一つです。第2波や第3波によって感染者の増減が繰り返される状況からは、まだ多くの人々が自由に先立つ価値を見出していないことが指摘できるでしょう。さらには、この期に及んで未だに政治家たちが夜の街へ繰り出したということが報道されていますが、彼らは救いのないほど自身の自由を溺愛しているのでしょうか。これまで他者の存在について種々議論が重ねられてきました。今、このような世界情勢の中で、これほどまでに他者へのコミットメントが必要とされる時はありません。これらの議論は美辞麗句が並べられたものだったのでしょうか。そうとは信じたくありません。実りのある議論だということが証明できる機会が今なのです。

もうすぐ新しい学生たちが大学に集う季節が訪れます。大学に勤める者としてここで学ぶ他者の傍らでこの未曾有の状況を切り抜けていこうと考えています。



## 5) 会員からのメッセージ

### ①ディベートとの出会い、 ディベート教育・研究への抱負

上土井 宏太 (九州大学大学院)



はじめまして。日本コミュニケーション学会に新たに入会させていただきました、九州大学大学院 地球社会統合科学府に所属しております上土井宏太と申します。大学院ではディベートの教育効果について、井上奈良彦先生指導のもと、研究を進めております。

まず、私の経歴について簡単にご説明いたします。学部・修士は九州大学工学部/工学府に在籍して、応用化学(匂いを検知する有機化合物の合成や、特定配列の DNA を検出するセンサーの開発など)の研究をしていました。学部ときに英語研究部(ESS)に入部し、ディベートを始めたのが、今の研究につながっています。修士卒業後は福岡県庁に就職し、3年間働いた後、2018年4月から九州大学附属図書館に職員として戻ってきました。そして、2020年4月から地球社会統合科学府で社会人博士として、図書館での勤務の傍ら、研究を進めております。

私がディベートと出会ったのは九州大学工学部2年るとき、授業の担当教員から井上奈良彦先生を紹介していただき、ESSの練習に参加したのがきっかけでした。それ以降も定期的に参加し、もはや10年、手前味噌ではありますが、九州大学ESSの生き字引のような存在になってしまいました。私が主に行っているのはパラメンタリーディベートと呼ばれる英語即興型のディベートで、論題が発表されてから15~30分の短い時間で準備をする形式のもの

です。学部生・修士の院生のときは井上先生のご支援もあり、国内・海外問わずディベートの大会やワークショップに数多く参加させていただき、さまざまな経験をすることができました。当時、講義や実験もそれなりに忙しかったのですが、ずっとディベートをしていたような印象が残っています。

福岡県庁では3年間環境関連の業務を行っていました。仕事自体はやりがいもあり面白かったのですが、卒業後も定期的にESSの練習に参加しており、やっぱり大学で働きたいなー、と思ったのと、修士課程の学生だったときに図書館のTAをしており、そのときにお世話になった職員さんともう一度一緒に働きたいという気持ちもあって、九州大学附属図書館の試験を受けたところ、無事採用していただきました。

大学で働きはじめると、物理的な距離が近くなったこともあり、井上先生の研究室にしばしば通うようになりました。お話を伺っている中で感じる先生の研究に対する熱意や研究の奥深さを感じるにつれて、自分でも研究してみたい、という気持ちが強くなり、先生に相談したところ、社会人博士として博士論文を執筆する機会を与えていただきました。職場である附属図書館の上司にも理解を示していただき、「ぜひ、がんばって博士論文に取り組んで欲しい」と言ってくれたので、院試を受け、無事博士課程の学生として一歩を踏み出すこと

ができました。

研究をしてみようと思ったのは、「ディベートにはポジティブな教育効果があると言われていたが、それは具体的にどういうことなのか可視化したい」という問題意識があったからで、研究を通して、ディベートの教育効果について明らかにしていこうと思っています。まだまだ

手探りの状態なのですが、井上先生から懇切丁寧な指導をしていただいております。その指導に応えるべく研究を進めています。

会員みなさまには今後ともお世話になるかと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

## 5) 会員からのメッセージ

### ②自己紹介と研究テーマ

岩崎 舞子 (西南学院大学大学院)



初めまして。西南学院大学・修士課程1年目の岩崎舞子と申します。宮原哲先生にご指導いただいております。私の研究テーマは「日本におけるコミュニケーション力重視の英語教育」です。このテーマは壮大なもので、問題提起を目的に研究を進めたいと考えていますが、最終着地点がどこになるか現時点では明確でない分、さまざまな観点から取り組むことができるものだと感じています。

最初に私がこのテーマに興味を持ったのは、民間の英会話学校に勤務中のことでした。「コミュニケーション力を上げましょう!」「英語では特にコミュニケーションが大事です!」という内容の教材が多く、テキストに沿って授業をするのですが、なぜかうまくいかないことの繰り返しで、その理由は何なのかを考えるようになりました。また、コミュニケーション力、というと外国語、特に英語を使う際の能力と考えられていることにも疑問を抱きました。コミュニケーションに関する本を読むうちに、「『己』の概念が異なる、ハイコンテクスト文化の日本で、明示的なコミュニケーション力を強めることは果たして効果的だろうか」という

疑問が生まれたことが出発点となり、今に至ります。

現在は、このテーマに対して問題提起を行う前段階として、日本が「コミュニケーション力重視の英語教育」に辿り着いた経緯・背景を明確にするべく、英語教育史の文献を閲覧しています。時代によって、必要とされる言語スキルは違い、それに伴い教育方針・教授法も変化します。現代の「コミュニケーション力重視」という教育方針は、単なる「流行り」ではなく社会的な背景、主にグローバル化などが大きく関係しています。当初、私自身が考えていた「ハイコンテクスト文化の日本において、コミュニケーション力重視の言語教育は効果的なのか」、「日本人に合った英語教育とは何なのか」ということ以前に、言語教育における歴史的・社会的背景を見直すことの大切さを感じている次第です。

いつの間にか当たり前となった「コミュニケーション力重視の英語教育」ですが、日本の英語学習者(研究対象は大学生)はどのように感じているのでしょうか。英語での高いコミュニケーション力(言語運用力や意思疎通のスキ

ル)を身につけることによって広がる新しい世界を楽しみに学習に取り組む人もいれば、コミュニケーション力も英語力も本当に必要なか分からずに取り組む人もいます。複雑なテーマではありますが、私はコミュニケーション学を専攻する一人として、日本での「コミュニケーション」という言葉の解釈や使われ方を見直すことも必要であると感じています。日本が歩んできた英語教育の歴史に敬意を払い

つ、今後の日本の英語教育(外国語教育)についてさまざまな側面から考察し、研究を続けたいと考えています。

2020年は、人に会えることがどれだけ幸せなことかを再確認した一年でした。今後学会等で、先生方や会員の皆様に直接お会いできる日を心から楽しみにしております。皆様よろしくお願いたします。

## 6) 編集後記 仲里 和花(沖縄キリスト学院大学)

この度、執筆者の方々、支部役員の先生方のご協力により、JCA九州支部ニューズレター36号を発行することができました。

今回は、コロナ禍の中で、毎年秋に行われていた九州支部大会が中止となり、支部大会の報告の掲載ができなかったため、例年より短縮された内容となりました。

3月末にオンラインでの支部大会開催が決まり、その詳細について吉武先生と横溝先生に、紀要18号の報告や19号の投稿論文募集について埴先生に、コロナ禍で考えることについて平野先生にご執筆いただきました。

また、会員メッセージでは、若く頼もしいお二人の新会員の上土井さん、岩崎さんにご執筆いただきました。

たいへん不安な状況にありますが、3月のオンライン支部大会、支部紀要での特別企画など、九州支部では、この状況だからこそ、コミュニケーションの意義、そして新しいあり方をもう一度考え直す機会を提供し、会員同士の共有・交流を通して支部活動の活性化を図っていくことができると切に願っております。今後とも九州支部の活動をご支援いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

---

発行元：

## 日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒830-8555 福岡県久留米市小森野 1丁目1-1

久留米工業高等専門学校 一般科目(文科系) 横溝彰彦

電話：0942-35-9300(代表) メール：kyushu@caj1971.com

URL：<http://www.caj1971.com/~kyushu/>

---